天文學を志した彼の話

能田忠亮

There is no hopelessness so sad as that of early youth when the soul is made up of wants, and has no long mé mories, no super added life in the life of the others; though we who look on think lightly of such premature despair, as if our vision of the future lightened the blind sufferer's present.——

何一つとしてこりごころのないあの彼。人間としては未完成であり、學尙淺く、加之性愚鈍。これが彼の全部である。人間として足らぬところは一生修養に心掛けて、或は補ふことが出來るかも知れない。學問の淺きも亦不斷の努力によつて幾分深味を增すことが出來るかも知れない。性愚鈍といふに至つては最早如何ともすることが出來ない。それであり乍ら神聖にして莊嚴そのものである天文學の殿堂に入り得るだらうか。而もあの病弱を以てしては尙更あやぶまれるではないか。此の懸念にも拘らず何故天文學を志したか。人或は嘲けつて良心なき身の程知らぬ馬鹿者の所爲となすかも知れない。或は又肯蛇に恐れぬ輩敢て學問の尊嚴を冒讀すこて排されるかも知れない。尙又小膽意氣志なし何ら爲す所なけんと見棄てられ顧みられないかも知れない。彼はこれらにつきぐれだけ苦しみぐれだけ惱んできたか。而も惱み得ることを天帝に謝しつゝも、今尙苦惱を續けて居る。それでも尙天文學を何故やるのだらう。

古人はいつた。「運命は人の性格である。」と彼が天文に志す樣になつたのを或はさういつた樣なものかも知れぬ。それはこにかくこゝで私は彼の身の上話しをする無作法を許していたゞきたい。さて瀨戸內海のさる小島の百姓と漁師を稼業とする時代ばなれのした家に彼は幼時多くの兄弟姉妹と共に全く原始人的生活を送つた。小學校に上る頃彼は母親の生家に養はれる身となつた。而して今日迄も恩愛淺からぬ養父母の暖い手に何不足なげに育つてきた。その間表面的の苦しみはなかつたにせよ內的に如何に苦しんできたことだらう。

彼が中學三年の頃養母の姪に當る赤兒が彼の妹として家族の一人に加へられた。その頃から快活だつた彼の顏が時々いひ知れぬ表情をしだした。既に彼はある家庭の事情により幼くして人生知るべからざる世の醜惡さを知つて居た。その環

境に於ける無智と盲目的偏愛。さては教養なき感情の爆發。それにも關らず彼はよく自己の立場を解し何事も小さな胸に堪へて苦しみつゝも、人としての温味を失はぬ樣にと心がけた。そして目出度く中學を終へて京都の高等學校に學ぶ事になつた。これからの彼の生活は實に目まぐるしいものであつた。若い多くの人達の苦しみ出すのは此の頃からだらう。彼もその例に漏れず苦しんだものである。そして誰もがやる樣に彼も亦人生といふスフィンクスの樣な謎の姿に或は、捕捉しがたき狐火の行方に唯あてもなく迷つたものである。可愛想に彼にはその惱みの背後にあるものを語り合ふべき友が居なかつたのである。

「恍とし惚とし空しく日暮に孑然として身の爲すなきを哀む抑〻爲すあるを得るも命か爲すなきを得るも命か。その然るに安じて簞食壺漿陋巷の窮に甘んずるも將又天を怒り地を罵りて寧日なきも命の致す處か。昔者夢に胡蝶と化し悠々生を悅べる莊周は羨むべき哉。自ら雷雲の上に昂しとして凡百の些事を哄笑し去りしニイチェは憐むべきかな。あゝ愚鈍遂に知らず、あゝ愚鈍！」

それでも彼は希望に輝いて居た。そして樂しかつた。こころが三高を後一年もせぬ内に終るといふ年の秋の初め、たゞかりそめに思つた病が俄かに重くなつて醫師はもう恐らく駄目だといつた。彼の父や母の驚きは勿論彼はどんなに歎き悲しんだ事だらう。彼はその病を一生の試みとして受けこらねばならぬかと思ふと、これまで自分にかけた希望も絕え入るばかりで身も世にあらぬ程歎いた。美しい希望の夢からたゝき起されて醜い疲れた現實の彼の姿に眺め入つた時煩悶は潮の如く抑し寄せ、煩悶は深い淋しさへ變つていつた。それは如何なる對象によつても癒されない痛手であつた。彼は痛手を堪へて淋しがるより外なかつた。

何故に自然は彼を容れてくれないだらうか。只一人とり殘されてゆく樣な氣がして彼は殆ど爲す處を知らなかつた。併し彼にはもう苦しむ氣力がなかつた。唯もうあるが儘に凡てをなげ出してどうでもしてくれと腹をきめてしまつた。島へ歸つて休養中彼は又父の頻死の大病に手ひどく打ちのめされた。そしてジクジクと微熱が續いていつた。毎日檢温しては大息した。靜養中新らしい年を迎へたけれど別に新らしい氣分にもなれずたゞその日その日を幾分感謝を以て送り迎へする樣になつたのをひどく嬉しく思ふ樣になつた。人が泣くに泣かれぬ悲劇に泣かされる度毎に深まつてゆくものは何だらう？とにかく少なからず自信力を失つた彼は、もう諦めるとによつて何の努力もしようとはしなかつた。諦めから稍々平靜にかへつた彼はもう凡てに感興を覺えなかつた。凡てから離れてゆく淋しさはどこても堪へきれなかつた。彼は一體これからどうなるのかを思つた時、一人淋しくさめざめと泣いた。

一體何が正しい自然の姿だらう一體誰れがそれを知つて居るのだらう。極を失つた彼に今後の方針のたゝぬのは當然なことである。

私はこゝに再び彼れの家庭について語る事をやめよう。何となれば彼の家庭は今や最も和氣に滿ち輝いて居るから、併し一般の母性といふものと家族制度に對する「彼の考へ方」については寧ろ悲慘なものがある。そして彼はいつて居る。やがて自分といふものが家庭の人となる事を思ふ時すぐ幸福といふものが華やかにやつては來ぬと。そして世に信ずべき頼るべき愛すべきものは何だらう。彼は生きる爲めには是非之れが必要なのだ。

健康が知らね知らぬの間にかへつてきた。彼は野山海邊を靜かに散歩するのを唯一の樂しみとする樣になつた。彼は五月晴れに若葉の青みゆく日朝の靜けさを破つて勇ましく名乘り出た雲雀を又なく懷しく思ひ出した。

「前を見ては後を見ては
もの欲しとあこがるゝ勿れ
腹からの笑ひといへど
悲しみその中にあるべし……」彼は雲雀を親友の一人に數へ込んだ。島がくれゆく白帆の影の長閑さ島の彼方から湧き出た雲のをかしさ。なよなよと咲き匂ふ藤のきよさ。山吹のゆかしい一重。彼の世界は急に明るくなつた。彼は傷ける心を自然の暖い懷に托してしみじみと自然を味はつた。自然こそ彼の避難すべかりし最も敬すべく愛すべき信頼すべきものではなかつたか。

彼は又やわらかな風のふく初夏の夜、漁火漸く消えて月明らかなる夜に親しみ初めてから更に自然の手に抱かれて凡てを忘れ得る樣に思つた。彼は遂に

夜なれば美しい星の光りがあればよい。
晝なれば暖い日の光りがあればよい。

それで澤山だといつた。そして父の意志も母の意志も兄のすゝめも友のいさめもきかず遂に天文を志した。彼の父も兄も彼のさうした勝手な眞似或は成り行きを遂に快く許してくれた。そして彼は誓つた。淋しいけれど生ある内はひたすら此の道に精進せん事を、そして餘計な穿鑿はもう決してすまいと。そして此の教室の諸先生並に諸先輩友人の御懇篤なる御教導によつて少しでもお役に立てば願ふてもない事と思つた。併し彼は誠に性のわるい業人である。一日とても眞から底から忠實にやつた事があるだらうか。それはとにかく彼は矢張り凡俗の子である。色々な欲望と疑が又もや起り出した。彼は遂に此の道に精進し得るだらうか。宇宙本然の姿に面してそのかくされた意味を感得し得るだらうか。もし得たとしてもそれが何になるだらう人類に貢献なんどゝは口幅廣い。もし感得し得たとしてそこに無限の平和があるだらうか。「宇宙征服……何といふ傲

慢な言葉だらう！。」彼は神經質的にかういつて「併し自己を解し得る偉大なる人間はやがて宇宙の征服までゆかなければウソだ。そこに人間としての誇りがある。」といつた。「でなければその偉大な人達の存在の理由がなくなる」と。尙彼は悲し氣に續けた。『自己すら解し得ない自分が天文をやるとは誠に恥しい。そしてその道の方には却つて迷惑だとさへ思はれるだらうふ。併し自分としてはさうするより外に生き方がない。それでたゞもう此の上は異常な耐忍と不斷の努力を以て人生の態度を確定する爲めに此の道に精進してみたい。もし人間といふことゝ兩立し得ないものであるなら喜んでいつでも此の道を去らう、同時に地上から消え失せよう。實際私が人間であることを忘れないで居るならば私は正に哲學科學以外の世界を發見するだらう。だつてさういふ氣がするんだ。もしさうでないとすると「茶代舟賃」を忘れた旅人に過ぎないもの。又私が生活といふ事を忘れないで居るならば私はその墓場を見付けおかう。でないと私は野たれ死をするもの。實際私は死に面して、尙人の子として社會の人として世界の人として自分の過去をふりかへつてみるだけの時間が與へられるだらうか。思つてみてもゾットする。』彼の獨り言は何時迄經つてもやみさうもない。可愛想に彼はそんなことばかり考へて居て折角學校へ講義をきゝに出ても多くボカンとして居る。そして學校制度といふものに強いて自己を合はしてゆく事の誠に拙い事をかこつて居る。

最後に彼はいつた「此の天文の教室が學校それ自體であるとしたら稍理想に近い學校となるだらう。こんな教室に御親切な諸先生、先輩方の指導を受ける事を愉快に思ふ』と。そして彼は『だから私はもつともつと勉强しなくては』と、心には思つて居ていふのだらうけれどもつとも實行しない。彼が實際如何に今後を切り拔けてゆくか私は暫く彼のする事を默つてみて居よう。そして彼の最も妨きな言葉を以て私は此のお話をやめるとしよう。

Tout annonce d'un Dieu l'éternelle existance,
On ne peut le comprendre, on ne peut l'ignorer:
La voix de l'univers auno nce sa présence,
Et la voix de nos coeurs dit qu'il faut l'adorer.

傷心

能田　忠亮

冬の弱々しい朝日を受けて地球は世の喜びも、悲しみもありとあらゆる人生の諸相をのせたまゝ、何の躊躇もなく同じ旅路を辿り初めた。もの心ついて以來、初めて靜かに、年を送り迎へた私は、餘りの平凡さに、フト過ぎし日の痛々しい